恭仁宮跡・元正天皇陵・平城宮跡歴史公園　令和８年度研修旅行 報告

レイカディア大学同窓会
甲賀・湖南支部 研修旅行部

令和８年 10 月 23 日（金)、レイカディア大学同窓会 甲賀・湖南支部の研修旅行で特別史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡)・宮内庁管理 元正天皇 奈保山西陵・平城宮跡歴史公園（世界文化遺産「古都奈良の文化財」を構成する施設の一つ）を訪れました。

我々が乗る滋賀観光バス(株)のバスが９時 30 分、木津川市加茂町河原東大門の臨時駐車場に到着すると「ふるさと案内・かも」のガイド飯島正夫氏と村井由美子さんが待ち受けておられた。

早速、Ａ班(湖南市乗車 12 名)・Ｂ班(甲南乗車 14 名)に別れて案内して頂いた。





「恭仁京大極殿址(京の字の口が日)」の石碑の奥に「山城国分寺阯舊恭仁宮阯」の石碑があった。ここは、平城宮から移築した大極殿があった場所で礎石も残っている。

「続日本紀」には**『天平 12 年(740)12 月 15 日。皇帝 前に在りて恭仁宮に幸し。始めて京都(みやこ)を作る。』**とあるが、

『天平 15 年(743)12 月 26 日。初めて平城の大極殿 并 歩廊を壊して、恭仁宮に遷り造ること四年にして、茲(ここ)に其の功 纔(わず)かに畢(おわり)ぬ。用度の費す所、勝(あげ)て計るべからず。是に至りて更に紫香樂宮を造る。仍(よっ)て恭仁宮の造作を停める。』と記し、紫香楽宮での廬舎那仏造立に専念するのだが、天平 17 年４月から紫香楽宮近辺の山火事、更に美濃地方の大地震の余震が続き、断念せざるを得なくなる。平城宮に戻った後、

『天平 18 年(746)9 月 29 日。恭仁宮の大極殿を國分寺に施入。』

と記している。即ち恭仁宮の大極殿を山城国分寺の金堂に流用したのである。



大極殿の礎石

大極殿（金堂）阯の東側には**『宜しく天の下の諸國をして各敬いて七重塔一區を造り。(天平 13 年 3 月 24 日条)【国分寺造立の詔】』**と「続日本紀」にあるように、七重塔の礎石(右写真)が残っていた。また、木津川の南にある「鹿背山」は石材がとれ大阪城の石垣にも使われており、残った石が「残念石」として現存するとのことであった。



山城国分寺跡七重塔礎石
写真の人物は吉治さん

続いて「宮」と「京」の説明を受けた。『狭義では、「宮」は政務を行う施設を伴う天皇の皇居で、「京」はその周辺に条坊制の市街地が形成された都城があり、条坊制が確認されているのは、藤原京・平城京・長岡京・平安京だけという。恭仁は「続日本紀」に右京・左京と呼ばれる市街地を民に班給したとあり、「恭仁京」と言えるのではないか。』とのこと。

最後に「くにのみや学習館」に寄った。そこで、次頁写真の地図をみた。恭仁宮と平城宮の位置関係が良く分かるのだが、私は「泉津」が気にかかった。ガイドさんに聞くと、ここに泉橋があったという。

「続日本紀」には
『天平 17 年 5 月 5 日　地震。日夜止らず。▼是の日。車駕、恭仁宮に還る。参議　従四位下　紀朝臣麻路を以て甲賀宮の留守役と為す。天平 17 年 5 月 6 日　地震。」車駕、恭仁京の泉橋に到る。于時(そのとき)。百姓、遥に望みて車駕を道の左で拝謁(はいえつ)す。共に万歳を稱す。▼是の日。恭仁宮に到る。』とある。

百姓の万歳は、天皇が久しぶりに帰って来て、恭仁がまた都になると思ったのであろうか、しかしながら、10 日には**『恭仁京の市人、平城に徙(かち)し。暁夜、爭い行くこと相接(あいせつ)して絶ゆること無し。』**と記されている。

それはさておき、私が気になったのは、泉橋は恭仁宮の西に在り、少し離れている。今までのように、和束越えの東北道を通っていない。何か理由があったのだろうか。

バスの駐車地は恭仁小学校のすぐ南にある。バスに戻ると小学校から音楽が聞こえてきた。通りすがりの人に聞くと、明日の運動会の練習をしているとのこと。恭仁小学校は明治 6 年の開校で現在の校舎も昭和 11 年の建築。大変レトロな雰囲気であった。



恭仁宮と平城宮の位置関係がよくわかる
元正天皇陵･元明天皇陵の位置が逆になっている

11 時にガイドのお二人の見送りを受けて、我々のバスは日本料理「花鹿」に向かった。
11 時 20 分「花鹿」に到着。我々は徒歩で 300m 北にある、元正天皇(**聖武天皇の叔母さんで元正上皇。聖武天皇彷徨五年の行程にほぼ同行した**)奈保山西陵に向かった。
参拝後「花鹿」に戻り 11 時 50 分から「松花堂若草」をいただいた。ドリンクは各自　自由精算。



元正天皇奈保山西陵で参拝

12 時 30 分に「花鹿」を出発し平城宮跡歴史公園到着は予約していたツアーガイド開始の 13 時少し前であった。
ここの出発時間を 15 時 40 分として、
基本コース（天平いざない館～朱雀門～大極門～第一次大極殿）・基本コースの途中でやめて自由散策するコース・基本コース後に「推定宮内省」「東院庭園」を回る健脚コースの三つ別れて行動することとした。

私は去る 10 月 1 日に甲南地域史研究会の歴史探訪で基本コースを歩いているので、健脚コースを歩いた。この「研修旅行記」では新たな気付きのみ記述する。
天平いざない館：長屋王邸から出土した木簡（平城宮跡資料館で展示されているものの一部）を見た。



＊長屋王邸は朱雀門の南東、東院の南にあった。長屋王は高市皇子の長男かつ天智・天武の孫という特に有力な血筋であり、妻に吉備内親王(草壁皇子と元明天皇の次女。元正天皇の妹)、藤原長娥子(不比等の二女)がおり、元正天皇や藤原不比等の信任も厚かった。長屋王邸跡から出土した木簡には、「長屋親王」と書かれたものがある。律令では、天皇の子が「親王」、孫以下が「王」と区別される。なぜ「親王」と書かれた木簡があるのか？これは、当時の朝廷で長屋王が事実上「親王待遇」を受けていた可能性を示すと考えられる。不比等の死後、政権の最上位にあった。しかし、神亀 6 年（729） 密告で長屋王邸は朝廷軍に取り囲まれ、翌日、王は自殺した。その室、吉備内親王と所生の皇子達も同じく自経した。

大極門から朱雀門を望む：門の扉は 17:00 に閉まる。東楼が復元されているが、西楼の復元は未定とのこと。平城京の造営では瀬田川、木津川を利用した水運による利便性と山中の木々の良質さから田上山の林材が使用され、田上山ははげ山となったと伝わる。今回の復元ではどこの木材を使ったのかと質問すると、吉野からと答えが返ってきた。

第一次大極殿に到着して、健脚コースの 4 人はガイドさんにことわり、14 時半頃「東院庭園」に向かった。途中、内裏跡を通り「遺構展示館」「推定宮内省」を見て、「東院庭園」に入った。平城宮跡歴史公園は国の施設で入場無料というのが良い。下写真の通り、立派な庭園で日本庭園の原形であるらしい。東院庭園を含む東院は首（後の聖武天皇）が皇太子時代過ごした場所という。

東院庭園を後にした我々は近鉄の踏切を渡り、一端平城宮を出て南面大垣沿いに朱雀門に向かった。この道は古の二条大路であるらしく、途中壬生門跡があり天平時代の想像図があった。かくして、バス乗り場に到着。バスは予定どおり 15 時 40 分出発。

帰路出会い頭の衝突事故を目撃したが、我々は無事、草津ＰＡを経て出発地に帰った。

以上、記：村上多津美



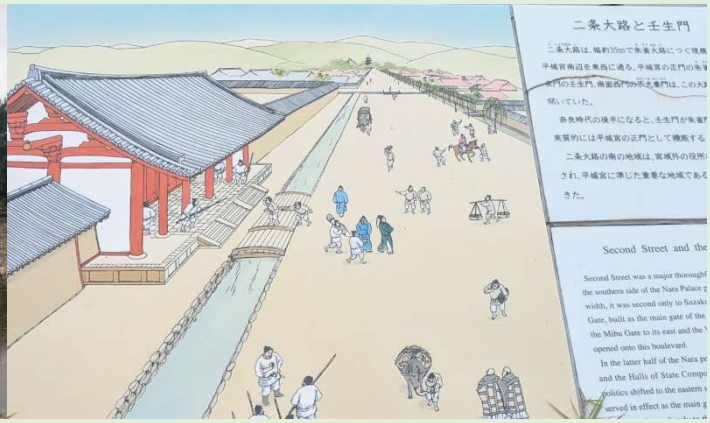
大極門から朱雀門を望む



復元第一次大極殿：平城宮はやや高台になっており、東に東大寺大仏殿、その向こうに若草山が見えた



東院庭園の風景



壬生門跡の説明板